

討議

【鄭】では質問を受け付けたいと思います。

【竹内】鎌倉女子大学の竹内です。

慈濟の「やればいい」というスローガンは、他者のために考えたり議論したりというもので、哲学的に反省したりする以前のものとして、まさに「やればいい」ですね。それはありうる立場だと思えますが、弁証的な関係で自己と他者を結びつけようという田辺元の死の哲学においては、すこし違った質のものがあるかと思うのですが、そのへんはどうお考えですか。慈濟の他者認識とくらべて。

【廖】竹内先生、ご質問ありがとうございます。

他者について田辺はどのように考えているのかというご質問ですが、田辺の死の哲学において、それは二つの側面から考えることができると思います。

まずは哲学的側面です。たとえば理性的な考え方を押し広げていくと、実際には押し広げきれないところがあり、そこで他力があらわれてくる。そのように他力が入っていくことよって、死んだ理性が復活して、再び自分を救い、他者や、自己以外の哲学体系、宗教体系をまきこんで、対立しながら統一するというようなことを続けていきます。それは彼の他者理論、表現だと思えます。これが哲学的側面です。

もうひとつ、宗教的側面から言うと、我々の実践には反省する心が必要です。慈濟の例で言えば、現場で何



鄭力軒氏

かいいことを実践したときには、必ず自己反省が必要です。

つまり、宗教には哲学が必要だし、哲学には宗教が必要です。それは、知識面での他者ということですが。田辺はこれを通して、現場での他者理論を見いだそうとしています。ですから、田辺の哲学は実践の哲学でもあると、私は考えています。それは慈濟的な意味での実践ではありません。哲学においては実践があるかもしれませんが、現実の世界ではそれはおそらくそうではないと思います。

【鄭】 第三部はここまでにしたと思います。司会者の方からひとつ感想を述べさせていただきます。

私は社会学を専門にしていますが、ここで討論されたような死生にかかわる問題は、社会科学が必ず注目しなければならぬものであると感じています。私はアメリカ、日本、それから台湾と三地域で暮らしたこ

とがあります。そのような経験からも、お二方が発表された内容には非常に興味深いところがいくつもありました。池澤先生が最後におっしゃっていた、ゆるやかな宗教というあり方や、廖先生がおっしゃられた自己否定の哲学というものは、生活の中で実際に感じとることができるもののように思いました。

それでは第三部はここで終わりにしたいと思います。(拍手)